



生くること苦しと冬の花蔵  
 鮫鱈の七つ道具を雪に並べ  
 能面につもる歳月雪催  
 谷へだて獵夫と獵夫呼び交す  
 冬銀河ぐるりと森に囲まれる  
 自画像に影たしてゆく三が日  
 久々に魚信あたりあるべし初句会  
 初庚申音地を這ひて遠くまで

髯丸き松本達磨初庚申  
 四阿屋山我ら餅なし正月よ  
 なぜ出来るセーターの毛玉の研究  
 蠱惑的演出よ素肌にセーター

俳句俤々

小林貴子

千代田葛彦は大正六（一九一七）年生れ、昭和二十五年に「馬酔木」に入会。昭和三十九年刊の句集『旅人木』で俳人協会賞を受賞している。中学校の先生を務められた。

田螺鳴くルオーの日いま宙にあり 葛彦

コップの水見てをり八月十五日

現俳協『昭和俳句作品年表』戦後篇編集の過程で馬酔木系俳人を私が担当することになったら、宇多喜代子さんが「馬酔木につどった俳人たち」という資料を下された。その中で葛彦の紹介を書いているのが我々「鷹」で一緒に緒した小浜杜子男さんだ。文中に葛彦の〈子雀もおとなになつてしまひけ

り〉の句が引用されており、これを入集するかどうか判定する時に、宇多さんが「あら、面白いわねこれ」と発言。そこで入集すべく制作年を「馬酔木」に当るも発見できず。万事休して小浜さんに往復葉書を出し、制作年を尋ねた。お返事を下さり、この句は「葛飾句会」という葛彦を囲む会で、小浜さんを詠まれたものとのこと。教育者の葛彦が若人の成長を頼もしく感じた挨拶句だ。が、「こんな甘い句」は残すつもりはなく、句集にも入れられなかったらしい。しかし私は上記の経緯から、この句に愛着を覚えている。実際に会った人からエピソードを聞くと、作品だけからは分らない人間的な肉づけがされて俳人の魅力は増すと思った。